渡辺リポーター

市民リポーター

「市民の足」

循環バス「ハチ公号」の運行会社を訪ねて

広報「おおだて」九月十六日号に「元気に市内を回っていますハチ公号」という記事があった。

また、前述の「天声人語」にあった東京渋谷駅より住宅街の狭い路地をミニバスが七月から走っているという記事を思い出し「渋谷」と「ハチ公号」の因縁めくことに少なからず心を動かされた。

近年バス利用者が激減していて「市民の足」の先行きを心配していた一人として、大いに興味を持ちリポートしてみることにした。

会社を訪ねる前に「百聞は一見にしかず」とばかり、バスターミナル八時二分発の「ハチ公号」に乗車し、運行経路を一巡した。そして「ハチ公号」の本社を訪問。

会社側では、木村取締役営業部長、安部課長、村木主任の三人が大変お忙しい中、親切丁寧に応対してくださった。

運行の背景などとしては

(1)最近の乗客数は、昭和四十年代の三分の一ぐらいであり、それに伴い路線の整理をせざるをえなかった。

(2)市街地の空洞化現象が進む中、活性化のため市街地に客を呼び戻すことを目指し、数年前からミニバスの運行などを考えていた。許認可等の関係で時間がかかったが、やっと実現した。

(3)客層は、病院、買い物、温泉利用の三点を主に考えた。現在は一方向だけだが、これは市立病院や、御成町の病院の立地場所から、乗降客の便を考えてのこと。また、市民に親しまれるように「ハチ公号」と命名した。今後は反対回りや停留所の間隔も検討していく。

(4)今後、地域の商工会議所や商店関係者と連携を図っていきたい。

(5)乗合バス単独では経営も難しくなってきているが、官民一体となって「市民の足」として続けていきたい、とのことであった。

左からバス会社の木村取締役営業部長、安部課長、村木主任

取材を終えて

「市民の足」二題として、タクシー会社、バス会社各一社ずつ訪問した。この両社に共通していることは、大館市の現状、すなわち高齢者の多い地域性や市街地の空洞化現象を正面からとらえ「市民の足」として何ができるかを念頭に置いて営業していることだった。

したがって「私たちは当たり前のあいさつとサービスのできる普通の会社を……」また、具体的に客層の対象を「病院（通院）・買い物・温泉利用の三点を……」ということだった。自助努力で、できるもの、関係機関と連携なしには困難なもの、いろいろご苦労がうかがわれた。

幸い、過日行われた市議会の一般質問に対し、市長さんが「高齢者への助成については、無料パスの支給として、財源確保ができ次第、来年度中にも実施する方向で検討している」（10月発行.議会だより50号）と心強い答弁があった。

「市民の足」が遠来の客にも好印象を与えることを信じて、ペンを置く。